

(論文内容の要旨)

序論

Joyce は謎々に取りつかれた作家である。幼少期の Stephen は友人 Athy の謎々に考え込み、大人になった Stephen は小学生たちに難解な謎々を出題する。この嗜好は Joyce 自身のものでもあり、彼は、*Ulysses* に登場する「マッキントッシュの男」とは一体誰なのかと周囲の人々に問いかけて楽しんでいた。また、*Finnegans Wake* を *Work in Progress* という仮題で連載し、本当のタイトルを友人たちに当てさせてもいる。前者は今日に至るまで確たる正解は示されていないが、後者は Eugene Jolas が見事に正解して賞金を手にしている。

本論文では以下の5つの謎々に回答を試みる。これらに解答があることを祈るばかりである。

第1章 “The Dead” において、Michael Furey はどこに存在しているのか。

第2章 *Portrait* において、なぜ Dante は栗色のブラシをもっているのか。

第3章 “Lotus Eaters” 挿話において、Bloom はなぜ木に変身するのか。

第4章 “Circe” 挿話において、Bloom はなぜ豚と羊の脚を購入するのか。

第5章 “Penelope” 挿話はなぜ8つのセンテンスで構成されるのか。

Chapter 1 : Michael Furey as a Ghostly Gas in “The Dead”

Dubliners の最終短編 “The Dead” 「死者たち」。従来、読者は本作品における死者一般に注意を向けることはあっても、ある特定の死者の姿を正確に捉えてきたとは言いがたい。実は、死者 Michael Furey—主人公 Gabriel の妻 Gretta のかつての恋人—が、ガス灯の炎となって二人を見守っているのである。

なぜ Furey はガスとして出現するのか。その根拠として、彼がガス工場(石炭からガスを生成)に勤務していたこと、また“gas”という言葉の語源が当時“ghost”であると考えられていたこと(その後、実際には、“chaos”が語源であると判明)があげられる。

Furey は、Morkan 邸の扇窓内のガス灯、また、Gabriel が回想するガラス瓶工場で見かけたガスバーナーの炎にも現れている。この時、Gretta は燃え盛る炎(flame)に親密な態度を示し、あたかも会話を交わしているかのようであるが、皮肉なことに、夫 Gabriel は、そんな妻の美しさを見て喜びを感じている。この対比—ガスとしての Furey に気づく妻と、それに気づかない夫—は何度も繰り返されている。この物語が Gabriel の視点から描かれていることによって、読者は、Gabriel と同様、妻の秘密の逢引に気づかないのである。

Furey が最も活躍するのは夫妻が宿泊する Gresham Hotel に屋外から差し込むガス灯の光としてである。部屋の電灯に不具合があり、Gabriel が蝋燭の火を持ち去るように命じるため、これが唯一の光源なのである。“ghostly”とも形容されるこのガス灯こそが、二人のやり取りを窓の外から眺める Furey だ。妻の視線は Furey を意識してか、“the shaft of light”に沿って動く。Gretta はガス灯としての Furey をじっと見据え、彼が既に死んでいることを夫に告げ、眠りにつく。Gabriel は、その後も屋外にいる Furey の存在を捕らえ損ね、部屋の片隅に Furey の姿を想像してみたりする。

最終段落の冒頭で、Gabriel は降り出した雪が窓にあたる音を聞き、窓の方を向く。これは、しびれを切らした Furey が自らの存在をアピールしているのだと考えられる。生前の Furey が Gretta の家の窓ガラスに小石を当てその来訪を告げた場面と対応しているのだ。しかし、彼はガス灯の光を目にとめるものの、その前景にある雪に注目し、次第にアイルランド西部へと空想をエスカレートさせる。その過程で、Furey の「不在の」墓の様子まで思い描く。そして、すべての生者と死者たち(“the dead”)の上に降り積もる雪を想像して物語は終わる。

タイトルである“The Dead”は、Gabriel と Gretta の視点のズレを表している。

夫から見れば、「死者たち」であり、妻から見れば「その死者」なのである。

“The Dead”の最終シーンである「死者が窓の外から生者のいる室内を覗く」場面は、Dubliners最初の短編“The Sisters”の冒頭のシーン「生者が窓の外から死者のいる室内を覗く」場面に対応しているのかもしれない。そうだとすれば、*Finnegans Wake*の円環構造を先取りしていることになる。

Chapter2 : A Maroon Brush and Stephen Marooned in *A Portrait of the Artist as a Young Man*

Joyceの作品冒頭には、緑（アイルランド）と赤系統の色（反アイルランド勢力を現す色）がモチーフとして使用される。後者の例としては、*Finnegans Wake*冒頭のフィニックス公園におけるorangeの勢力、*Ulysses*第一挿話でMulliganが自らのキャラクターにふさわしいとするpuce色の手袋、*Portrait*冒頭の歌詞に登場するroseなどがある。

これらの一例として*Portrait*で主人公Stephenの叔母Danteがもつmaroon色のブラシを考察する。彼女は、緑色のブラシをParnellに、栗（maroon）色のブラシをMichael Davittに捧げたものだという。これらのうち前者、緑色とParnell（アイルランドの「無冠の王」）の関係性は明白であるが、後者のmaroon色とDavittの関係性は不明だとされてきた。

本章では、“maroon”という語にもうひとつの意味「島流しにする」を読み込む。Parnellは愛人スキャンダルをDavittら保守的勢力に糾弾されて、失意のうちにアイルランドを追われる。その後、彼女とともに英国に渡るものの程なくして命を落とす。この事態はまさにDavitt（“maroon”）がParnell（“green”）を“maroon”したのだと言える。

Stephenにとって“maroon”（海の向こうに追いやる）という概念は、Parnellをダイダロス・イカロス親子—アテネからクレタ島に追放された—に接続する機能を果たす。彼はParnellの遺体が帰港する場面を思い描き、後に彼の死のあり方を

考えるのだが、そこにダイダロス・イカロスのイメージ(帰還、海上の死、太陽光線)が重ねられている。

故郷を追われて島に流される—“maroon”—というテーマは、小説の最後において Stephen 自身の問題となる。彼はアイルランド社会の文化・宗教との軋轢の中で祖国を出て行くこととなる。つまり、Stephen 自身が“maroon”される立場に陥るのだ。

ここに至って Stephen は小さい頃に Dante に教えられた地理感覚からの脱却を図る。アイルランドを英国に拮抗すべき文明の中心地ではなく、ヨーロッパの辺境に位置する島国として捉えなおす。Stephen は自らの出国を正当化すべく、アイルランドを文明の中心アテネではなく、そこから脱出すべきクレタ島に置き換えるのである。

Stephen の出発間際の日記には、Parnell の失敗した帰還のイメージ(月明かりの下、遺体が船で入港するシーン)を反転させたイカロスの出発のイメージ(月のない夜空の下、船が出港するシーン)が表れる。Stephen は、自らのアイルランド出発をとらえる際、“maroon”された Parnell というイメージを払拭し、“maroon”された場所から脱出するイカロスに自分を重ねることに成功しているのである。

Chapter 3 : Bloom's “Metampsychosis” in the Myrrhy Bath of “Lotus Eaters”

Joyce は Gilbert 計画表において、第5挿話の「場面」を「風呂」と設定しているが、実際には主人公 Bloom は市街を歩きまわっており、入浴場面の空想は最終段落に現れるのみである。では何故「風呂」が挿話の場面に設定されているのか。

1つの回答は、Bloom の精神が、路上にいる肉体を離れ、想像上の肉体に移動しているからだというものである。本挿話の彼は、一貫して視線を向けた人物に視点を変更させている—それを本稿で“parallax”と名づける—のだが、最後には自らの肉体に視線を向け(“foresaw”)、そこから彼は浴槽に浮かぶ自らの身体を見ている

（“saw”）のだ。

もう1つの回答は、最終段落に技巧の限りを尽くした Joyce が、批評家たちの注目をそこに集めたかったからではないか、というものである。最終段落67語を精査すると、計画表に記されたその他のキーワード、器官「生殖器」、学芸「植物学・化学」、象徴「聖体拝領」、技法「ナルシシズム」が見事に埋め込まれていることに気づく。挿話タイトル“Lotus-Eaters”も例外ではなく、「睡蓮」（“lotus” - “water lily”）のイメージが、浮き花（“floating flower”）として繰り返され強調されているのである。

しかし最終段落における“lotus”の機能はそれに留まらない。Joyce はホメロスの“lotus”の用法を Victor B rard の研究書 *Les Ph neciens et l’Odyss e* から学んでいるが、本書で B rard はホメロスが“lotus”という単語にヘブライ語の“lot”（英語では“myrrh”）の意味を加味したと主張する。ここで“lotus”という単語と、「没薬」“myrrh”および Ovid の *Metamorphoses* に収録された Myrrha の伝説が結び合わされる。

第五挿話の最終段落、入浴場面では、Bloom の肉体が木を表す“trunk,” “limbs,” “bush”といった単語で形容されており、「木への変身」のモチーフが読み取れるのだが、これは Myrrha の伝説に由来しているのだろう。Myrrha は父親と肉体関係に陥るのだが、それに気づいた父に殺されそうになり、「没薬」樹（“myrrh” tree）に変身するのである。

Myrrha の物語は第4挿話でも重要な働きをしている。Molly は *Ruby: the Pride of the Ring* という本にでてくる“metempsychosis”という単語の意味を Bloom に尋ねるのだが、この本のヒロイン Ruby は、「虐待される少女」「死」「家族」といったモチーフを Myrrha と共有している。また、Bloom が単語の意味を説明する際、古代ギリシャ人を例に挙げるなど、第4挿話には Myrrha の伝説を示唆するくだりが続く。

“Lotus-Eaters”挿話・最終段落において Bloom は、Myrrhaのごとく、木への「変身」“metamorphosis”を遂げる。しかし、彼は単に木へと「変身」するだ

けではない。そこには、新たに生まれ変わるイメージがあり、Myrrhaと同じく、Bloom は「輪廻転生」してもいるのだ。ここで2つの重要なコンセプト “metamorphosis” (変身) と “metempsychosis” (輪廻転生) が結び合わされている。それはまさに “metempsychosis” 「変身 輪廻転生」 (Bloom 自身の創作語) と呼ぶべきものである。

Chapter 4 : A Retriever of the Dead from a Pig's Crubeen and Sheep's Trotter in “Circe”

Joyce は Gilbert 計画表で 15 挿話の「器官」に “locomotor apparatus” を割り当てた。これが 15 挿話のクライマックスに仕掛けられた謎を解く鍵である。Bloom と死んだ息子 Rudy との再開場面に “locomotor apparatus” 一つまり「脚」が関係する。

Bloom は挿話冒頭、Olhausen 精肉店で「脚」— “a lukewarm pig's crubeen” と “a cold sheep's trotter” — を購入した。彼はこれらの肉を口にするのではなく、一匹の野良犬 (レトリヴァー、テリア犬、マスティフ犬、ダックスフンド等、様々な名指される) に与えてしまう。すると豚肉を食べた犬はなんと死んだばかりの Paddy Dignam に変身する。

犬が Dignam に変身した理由、それは豚に擬せられた Dignam の遺体を食べたせいではないだろうか。確かに両者の接点は、Paddy Dignam の名前が “pig” を含むこと以外にもある。8 挿話では Bloom が Dignam の遺体から豚肉を連想する場面があるし、Bloom が訪問した Dignam 家には遺児が 10 挿話で購入した豚肉があったはずである。そして決定的な関連はホメロスに求められる。挿話名 “Circe” が示すように、15 挿話の下敷きには『オデュッセイア』のキルケ挿話— 魔女キルケがオデュッセウスの部下の酒に薬を入れて豚にしてしまう— がある。飲酒が原因で急死した Dignam は彼らのように 15 挿話 “Circe” で豚 (肉) にされる。そして、豚にされた者たちがキルケの魔法で人間の姿を取り戻したように、Dignam は犬に

食べられて本来の姿を取り戻したのだ。

では、路上に放置されたままテキストの表面から消える“a cold sheep's trotter”とは何だったのか。これは、生後11日目に死んだ Bloom の1人息子 Rudy の肉体だったのだろう。Rudy は羊と縁が深い。たとえば、14挿話で Bloom は、妻 Molly が死後の Rudy が寒くないようにと、羊毛でコルセットを編んで埋葬したことを思い出している。Bloom が買った「生温かい」豚の足肉は二日前、夏の初めに死んだ Dignam であり、「冷たい」羊の腿肉はやはり11年前の真冬に死んだ Rudy の死肉なのだ。

挿話最終場面で、Bloom は、この日初めて精神的息子にして Joyce 版テレマコスである Stephen と二人きりになる。注目すべきは、この場面のト書きにある“A dog barks in the distance.”という一行である。ここで犬が羊肉を食べ、変身しているのだと想定される。その証拠に、11歳の Rudy がポケットから“A white lambkin”をのぞかせて現れるのはわずか数行後のことである。

Dignam と Rudy に変身する犬がレトリヴァーとして言及されたのは何故だろう。それはおそらくこの単語が意味するところ—“retriever”「取り戻す者」—と関係があるのだろう。この挿話の犬は、豚 羊から本来の人間の姿を“retrieve”「取り戻す」役割を背負っているのだ。

Chapter 5 : Dividing ∞ into 8 in “Penelope”

Joyce は、Linati 計画表において各挿話の具体的時刻を示したが、この計画表には18挿話(全編 Molly のモノログからなる)の時間欄だけに、謎めいた記号“∞”が付されている。これに基づいて、18挿話を現実的時間と関係なく読む批評家は多いが、実際、Molly は15分ごとに鳴る聖ジョージ教会の鐘を2度(1231及び1540行)聞いており、本挿話は決して時間と無関係な挿話ではない。それゆえ、計画表に記された記号は Joyce が時間設定を読者から隠蔽するための陽動作戦だと考える必要がある。

これまで批評家は Molly の内的独白を 30 分程度と予測してきた。しかし挿話の総行数 1609 行のおよそ 4 分の 1 を占める 1231 行目と 1540 行目の間に 15 分が経過していることが明らかである以上、もしも挿話の総時間が 30 分程度であったとすると、Molly は挿話の前半に後半よりも、速く(多くのことを)考えなくてはならなくなってしまふ。そこでこの論文では Molly の思考スピードを、15 分が経過している 1231~1540 行目の間の行数から導き出し、挿話全体を通して一定のスピードを保てるよう、2 時直前に挿話が始まり、最初の鐘(1231 行)を 3 時、2 度目の鐘(1540 行)を 3:15 と想定する。もしも、そうであるのなら、2:15 の鐘は、300 行目付近で鳴り、2:30 の鐘は 610 行目付近、そして 2:45 の鐘は 920 行目付近で鳴ることになる。しかしながら、それらの鐘のうちどの 1 つとして Molly が耳にしていなかったという事実がこの仮説の有力な反証となる。なぜ、鳴っているはずの 3 つの鐘がテキストに存在しないのだろうか。

第 2 センテンス(18 挿話は 8 センテンスで構成される)の半ば、300 行目付近の 2:15 の鐘がテキストに表れていないのは、最初の 3 センテンスで、Molly は屋外の音を全く意識していないという事実によって説明がつく。また、610 行目付近の 2:30 の鐘、及び、920 行目付近の 2:45 の鐘が、テキスト上にないのは、それらが 3 センテンスと 4 センテンス、及び、5 センテンスと 6 センテンスの間に位置しているからだと推測される。この推測の信憑性は、Joyce が 18 挿話執筆時に鐘の間隔に強くこだわっていたことから裏付けられる。Joyce は、タイプスクリプトの 48 ページに、2 つ目の鐘(1540 行)を挿入しているが、最初の鐘(1231 行)が 38 ページ、第 6 センテンスの開始が 28 ページ、第 4 センテンスの開始が 18 ページに設定されているのである。つまり、Joyce は意図的に鐘がセンテンスの間に来るように設定したのだ。

Joyce は、最終的に 2 つの鐘のみをテキストに入れた。もしも 3 つ入れてしまったとしたら、18 挿話の時間が正確に把握しうるか否かが確定してしまう。また鐘が 1 度しか鳴らなかったら、時間を特定することはできない。結果として、前者であれば「リアリスティック」な読み(たとえば、ダブリン在住の主婦 Molly)、後者

であれば「シンボリック」な読み（たとえば、永遠の時の中に生きる女神 Molly）を導くことになり、挿話の読み方の方向性を限定してしまう。2つの鐘しか鳴らさないことには、読者にその2つの読みを同時に許容することになるのだ。

結論

本論では序論で提示した5つの謎に解答を試みた。

第1章 “The Dead” において Michael Furey はどこに存在するのか。

（答）Furey はモーカン家からグレシャムホテルまでガス灯として出現している。Joyce は gas の語源を ghost だと捉えていたはずである。

第2章 *Portrait* において、なぜ Dante は栗色のブラシをもっているのか。

（答）Dante の maroon 色のブラシは、Parnell の maroon（島流し）される運命を暗示する。Stephen は自らの出国に際し、maroon される Parnell ではなく、maroon されたクレタ島から脱出するイカロス・ダイダロスに同一化する。

第3章 “Lotus Eaters” 挿話において、Bloom はなぜ木に変身するのか。

（答）ホメロスが lotus という単語にヘブライ語の lot (myrrh (英) 没薬) を読み込んでいることを知った Joyce が、挿話の最後に、Myrrha の物語—父との近親相姦の果てに没薬樹になる—を重ね合わせた。

第4章 “Circe” 挿話において、Bloom はなぜ豚と羊の脚を購入するのか。

（答）一匹の retriever (レトリヴァー・回復する者) に与えるため。レトリヴァーは豚を食べて Dignam に、羊を食べて Rudy (羊毛に包まれて埋葬) に変身する。

第5章 “Penelope” 挿話はなぜ8つのセンテンスで構成されるのか。

（答）18挿話の時間として指定された∞が8つのセンテンスに形を変えた。センテンスの間には時を告げる鐘が隠されており、これは挿話に流れる時間を神秘化する効果がある。

以上のように、解答への鍵はすべて言葉の複層性に隠されている。多義語を駆使することによって *Finnegans Wake* を構築していく Joyce であるが、このように初期作品においても多義語の果たす意義は大きい。

Joyce 言語の特徴である「多義語を基にした謎々」を *conundrum*（言葉遊びで作られた謎々／難問）と呼んでもよいかもしれない。

氏 名	こ じま もと ひろ 小 島 基 洋
-----	-----------------------

(論文審査の結果の要旨)

「私はこの作品の中に多くの謎やパズルを埋め込んでおいたので、教授たちは私の意図をめぐって何世紀も議論しつづけることになるだろう。それが不滅の命を獲得する唯一の方法なのだ」とは、ジェイムズ・ジョイスが自作『ユリシーズ』について語った言葉としてあまりにも有名である。そして、ジョイスの言葉どおりに、研究者たちはことごとくジョイスの仕掛けた謎に取り憑かれてきたが、そのすべてが解明されたとは言い難く、しばしばジョイス産業と揶揄されるジョイス研究はいまだに隆盛を誇っている。

本論文は、『ダブリン市民』、『若き芸術家の肖像』、そして『ユリシーズ』を取り上げ、そこに含まれている五つの謎の解明に挑戦した試みである。その全体を貫く共通した問題意識は、ジョイスが用いる多義語に焦点を当てようとしたことで、なによりもまずテキストの精読を基本に据えた姿勢がうかがえる。

第一章は、短篇集『ダブリン市民』に収められた短篇の中でも最も有名な、「死者たち」を一種の幽霊小説として読もうとした論考である。従来は物語の背後にいる存在として大きな扱いを受けていなかった死者マイケル・フューリーを、論者は前面に押し出し、彼の亡霊が実際に物語の中で出現しているのだと大胆な読みを展開する。その解釈のもとになっているのは、生前にマイケル・フューリーが働いていた「ガス工場」や、「ガス灯」という形で小説内に現れる“gas”という言葉の語源が、当時は“ghost”だと考えられていたという歴史的事実である。こうした語源をめぐる論者の指摘はきわめて興味深い。

第二章は、『若き芸術家の肖像』に現れる「赤」系統と「緑」系統の色の対比に、英国対アイルランドという従来の図式以上の意味をさぐるようとしたものである。こうした色彩のシンボリズムを扱う研究は、ややもすると単純化がすぎる結果を招きやすいが、論者はそうした陥穽に陥ることなく、“maroon”という言葉に着目し、そこに「栗色」という意味だけではなく、「島流しにする」という含みが響いてい

ることを読み取る。そしてさらに、それを愛人スキャンダルでアイルランドを追われた政治家パーネルや、この祖国を出て行く主人公スティーヴンと重ね合わせてみせる。

第三章から最後の第五章までは、いずれも『ユリシーズ』の謎を扱った論考であり、本論文の中心部を成すと同時に、質的にも高い水準を示している。とりわけ第三章は、『ユリシーズ』の第五挿話におけるブルームの入浴場面を取り上げ、そこにオウィディウスの『変身物語』のエコーを読み取るという、従来にない新解釈を提示したものであり、高く評価できる。ここで論者が注目するのは、第五挿話のタイトルに含まれている“lotus”という言葉であり、その語源をたどりながら、論者は『変身物語』に収録されている木に変身したミュラの物語を掘り起こしている。

続く第四章は、『ユリシーズ』第十五挿話で、ブルームが犬にくれてやる豚肉と羊肉をめぐる論考であり、肉を食った犬が変身して人間となって登場するのだという、意表を衝いた議論を展開する。しかし、一見すると突拍子もないように思えるこの解釈は、実は夢の論理に貫かれた第十五挿話全体から見るとまったく不思議ではなく、ホメロスの『オデュッセイア』を援用した論者の議論には説得力があり、十分に成立すると思われる。最後に置かれた第五章の『ユリシーズ』第十八挿話論は、モリーのモノローグに現れる教会の鐘の音から、この挿話の時間設定を特定しようとした試みである。ここで論者はジョイスのタイプ原稿を子細に点検し、ジョイスの時間に対するこだわりを実証してみせている。

総じて、本論文には過去のジョイス研究に見られなかった新しい指摘や解釈が多く含まれ、有望なジョイス研究者としての論者の将来性を予感させる内容になっている。ただ、謎を解こうとするあまりに、議論の細部において強引なところが散見されるが、これは論者の今後の課題として克服可能であり、意欲的な本論文の価値を損なうものではない。論者がさらに精進を続け、『フィネガンズ・ウェイク』論に挑戦する日が来ることを待ちたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十一年二月十九日、調査委員三名が論文内容とそれに関

連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。